
月のしずく

柏木雫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月のしずく

【Nコード】

N3773F

【作者名】

柏木雫

【あらすじ】

友達以上恋人未満の雫と栞。お互いに気になっているのにどうしても先に進めない。そんな時、美少女転校生が現れて…。

第1話：ハジマリ

小鳥の囀る声なげが、机に寝ころんだ耳に残って心地よい。想いは遙か遠くの水平線に陰を映し、紅に染まった葉は微睡む。

「童なれば、宿直人などにもことに見入れ追従せず、心やすし。」

教科書に羅列されている文章を口にする。

古典は苦手だ。

物語は好きなのだが、古典は生理的に受け付けない。

「じゃあ次は…美宮 雅子さん。東の妻戸つまどから読んで」

「東の妻戸つまどに、立てたてまつりて、我は南の隅の間より……」

今の私はメランコリアな気分と言ったところか。

窓を全開にする。

時折、金木犀キンモクセイの薫りと秋桜が風に乗って飛ぶ。

冷気が肌を刺す。

冬將軍の到来も間近…か。

何とも言えぬ感傷に浸っていると、隣から手紙が回ってきた。

『何考えてんだ？』

チラリと横を見る。

何事も無かったかのように、教科書を見続けている。

返事を書くかどうか迷ったが、書くことにした。

手紙を送ってきた主の名前は『工藤 栞しほ』だ。

家が隣同士な訳もあってか、生まれ落ちる前から家族ぐるみの付き

合いをしている。

『寒くなったなーって』

他愛もない手紙のやり取りが、授業の終わりを告げるチャイムが鳴るまで続いた。

第1話：ハジマリ（後書き）

頑張っ
て思い
出して
書きま
す！

第2話：遊戯

繚乱と咲散る、金木犀の花弁。

朱紅燃ゆる秋ともいよいよお別れだ。

秋が好きな私としては、何とも物悲しい時期だ。

しかし、私一人が四季を司っているのではない。いつかは樹木が白粉を塗る季節がくる。

これは抗えない運命なのだ。

『当たり前のこと』として、受け入れるしかない。

ヒトとは不思議なモノで、『当たり前』で『簡単』な問題をわざわざ難しく考える節がある。

そして…

「あてっ」

誰かに頭を叩かれる。

キヨロキヨロと辺りを見回していると、下辺から笑い声が聞こえてきた。

この特徴的な笑い声は…

「くきききき…」

「貴様！」

思っていた通り、栞だった。

手に丸めた紙を持っている。

間違いなくコイツが頭を叩いた犯人だろう。

「高校生にもなって小学生みたいな事してんじゃないわよ…」

呆れながら呟いた。

この様な行為は初めてではない。

毎朝、必ず紙で叩いてくるのだ。

本人曰わく、『栞様流・朝の挨拶』らしい。

毎朝叩かれる私も私なのだが、これが彼なりのスキンシップだと理解できているのでほうっておく。

それほど痛くないし、1日1回なので大して気にもならない。

「いつもは只の挨拶なんだけどな、今日は特別なんだぜ」

「担任と生徒の密会がバレてマズいから休校 … とか？」

栞はフツとニヒルな笑みを浮かべ、話を続けた。

「違う違う！話を聞いて腰を抜かすなよ！実はな…」

「校長と生徒の密会がバレてヤバいから休校 … とか？」

派手な打音が教室中に響き渡った。

教室にいた何人かがこちらの方を向いた。

どうやら栞が持っていた紙で机を叩いたらしい。

「続けていいかな…？」

「はい…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3773f/>

月のしずく

2010年12月18日03時30分発行